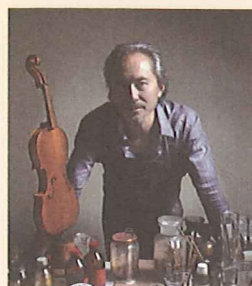


『ヴァイオリンの誕生とその歴史』



松下敏幸氏は、現在イタリア・クレモナに在住し、その地において弦楽器を製作しています。現代クレモナを代表するマエストロ（注・芸術家、専門家に対する敬称。大家）弦楽器製作者である松下敏幸氏と学習院大学史料館所蔵楽器との関わり、そしてヴァイオリンの歴史について、製作者の視点から解説していただきました。

松下敏幸氏

I 学習院大学史料館とのつながり

昨年（2012）春より、愛知県立芸術大学音楽学部井上さつき教授の依頼で行っている調査研究で、私は初めて、学習院大学史料館とのご縁を頂きました。井上教授と私は、日本人初のヴァイオリン・メーカーである鈴木政吉が製作したヴァイオリンを探し求めて、日本中を調査しています。学習院大学史料館には高松宮宣仁親王殿下（1905～1987大正天皇第三皇子。今上天皇叔父）が使用したという鈴木政吉製作のヴァイオリンが所蔵されており、それが平成23年（2011）に開催された「宮廷の雅」展（徳川美術館などにて開催）に出品されていたのです。

鈴木政吉（1859～1944）は、尾張藩士の家に生まれました。父は内職で三味線を作っており、維新後は三味線作りが家業となりました。ある時、未知の楽器であるヴァイオリンと出会った政吉は、この楽器に魅了され、独学で研究を続け、彼の製作したヴァイオリンは国内外の品評会でも評価を得るに至ります。さらに、大量生産（工場製品）の道を開いて日本の庶民に安価な値段で楽器を供給し、第



一次世界大戦中は、供給が途絶した欧州メーカーに代わって、世界中から大量受注を受け、年間10万挺を輸出するまでになりました。

異文化の楽器、それも歴史ある欧州のヴァイオリン製作を完全に独学で学び、世界と肩を並べる水準を目指した鈴木政吉という人物に、私は大変興味を引かれています。彼は近代日本における洋楽普及の父と言っても過言ではないからです。史料館所蔵の高松宮家の3挺の鈴木ヴァイオリンは鑑定の結果、3挺（分数楽器・1/8サイズ、1/4サイズ、3/4サイズ）いずれも鈴木政吉工場製品であり、残念ながら私たちが探し求めている政吉自作（手づくり）のものではありませんでした。そのうちの1/4サイズの楽器は修理をお受けしました。

II ヴァイオリンの歴史

イタリアにおいては、14世紀から16世紀にかけて起こったルネッサンス期に、特に美術や建築の分野で多くの芸術家が輩出され、優れた作品が生み出されました。音楽でもルネッサンス後期の16世紀後半からイタリアが中心となり、さらにバロックへと時代を牽引していきます。まさにその時期、ヴァイオリンを、私たちの知っているヴァイオリンの形態として完成させたのがアンドレア・アマティでした。

推定1505年、北イタリアのクレモナという小さな街に、アンドレア・アマティは誕生します。クレモナの古文書館の文献によると、彼はクレモナの最初の弦楽器製作者であり、1539年にはマエストロとして登録され、1566年にはフランス王シャルル9世から38挺の楽器の注文を受けています。それら楽器の裏板や横板、うず巻きには金粉で見事な装飾画が描かれていて、そのうちの1挺のヴァイオリンはクレモナ・ヴァイオリン博物館（2013.9オープン予定）に保存されています。彼の技術は孫のニコロ・アマティに継承されていきます。さらに1652年、ニコロ・アマティから暖簾分けしたアンドレア・ガールネリがガールネリ・ファミリーの流れを作ります。孫のバルトロメオ・ジョゼッペ・ガールネリ（別名デル・ジェス）に受け継がれ、彼自作の力強いヴァイオリンの音色は今も演奏家たちを魅了し続けています。そして、推定1644年、名工として世界に名高いアントニオ・ストラディヴァリが誕生します。

当時のクレモナではこの3つの弦楽器製作者の工房が主流となっていたのですが、特にストラディヴァリ工房は1700年代に入ると黄金期を迎え、欧州全土に名を広めます。この時代は今でいう学校制度はなく、マエストロを筆頭とした弟子、使用人という徒弟制度の中でしっかりと技術が守られ、伝承されていました。



III クレモナという街

なぜクレモナが弦楽器製作の聖地となったか。クレモナは山岳からも海からも離れた内陸に位置し、しかもポー川というイタリア一長い河があるため、秋から冬にかけて湿度が高く、深い霧が立ち込める日には湿度が95%にまで上がります。街全体が白い霧にすっぽり覆われて、太陽を見ない日が長く続くこともよくあります。湿度は木材に決して良いわけはなく、このような悪条件にもかかわらず、なぜストラディヴァリは500挺とも600挺とも言われる多くの名器を残すことができたのか。1982年に私はクレモナに渡りましたが、このことは当初、製作者として抱いた大きな疑問のひとつでした。

おそらく、こうした気象条件のハードルの高さがクレモナの製作者の技術を錬磨する動機づけになったと、考えられます。悪条件であればあるほど、知恵が必要とされ、木材を守るための処方が吟味され、数百年にわたって試行錯誤が繰り返された結果、より優れた手法が選り抜かれていったと思います。こうしたマイナス要因以上に、クレモナの歴史的・文化的な環境が大きな向心力となりました。イタリア一長いポー川が交易に重要な役割を果たし、街の経済を潤し、ルネッサンス期のミラノ、ヴェネツィアの隆盛に響応（エコー）しました。塔の街と呼ばれていたようにクレモナにはさまざまな宗派の教会が多くあり、必然、文化・芸術の面でも非常にレベルの高い街でした。

16世紀中期、教会音楽が中世以来のグレゴリオ聖歌から、バロック音楽へ移行していくに伴い、弦楽器の需要が増しました。さらに、オペラの形式を創始したクラウディオ・モンテヴェルディが1567年にクレモナで生まれ、1643年にヴェニスで亡くなるまで初期バロック作曲家として活躍したことを見逃すことはできません。音楽における弦楽器を必要性がますます高まり、クレモナでヴァイオリン製作が盛んになったと思われます。

IV ストラディヴァリによる黄金期

そして、17世紀から18世紀、クレモナの弦楽器製作技術はアントニオ・ストラディヴァリによって完成されていきます。彼は黄金比率を用いて楽器にとって最も重要なF



字孔の位置を決め、全ての楽器の設計図を書いています。彼はあらゆるものの製作に挑戦し、アマティやガールネリをはじめ他の製作者には持ち得なかった技術を習得しています。古典ハープ、バロックギター^{ちやうつがい}の製作、木工彫刻、象嵌細工^{かみ}、ヴァイオリンケースとその蝶番^{ちょうつがい}まで。こうした事実から、彼が木工彫刻家であり建築家でもあるフランチェスコ・ペスカローリから木工彫刻を学んだという説が近年、信憑性を増しています（ペスカローリはストラディヴァリが最初の妻と暮らした家の家主でした）。

木工技術の基礎、幾何学的な図案、音響的調和の考案を持っていたストラディヴァリだからこそ、彼の楽器は時代を越えられたのです。

ストラディヴァリは1690年にフィレンツェのメディチ家からヴァイオリン2挺、ヴィオラ、チェロを1挺ずつの依頼を受けていました。また、1702年7月3日にはスペイン王フィリッポ5世がクレモナを訪問しており、1694年から1709年までにスペインの王室に象嵌細工を散りばめた豪華な5挺の弦楽器クインテットを製作しています。

このように歴史をひもといてゆくと、常に皇室、王室、貴族が製作者のパトロンとなっていました。だからこそ、製作者はより良質な素材を選択し、製作の水準を高く目指すことができたと思像されます。

ただ、非常に残念な事に、クレモナの伝統は1800年以後、完全に途絶えてしまいました。

V 鈴木政吉ヴァイオリンへの思い

今回の高松宮家伝来鈴木政吉ヴァイオリンの調査過程で、私は、なぜ政吉は自作ではなく、工場製品を献上したのか、と疑問を持ちました。1800年までの弦楽器は、

